

いにしへの映画つれづれ⑱ 社会現象を巻き起こした「ララミー牧場」

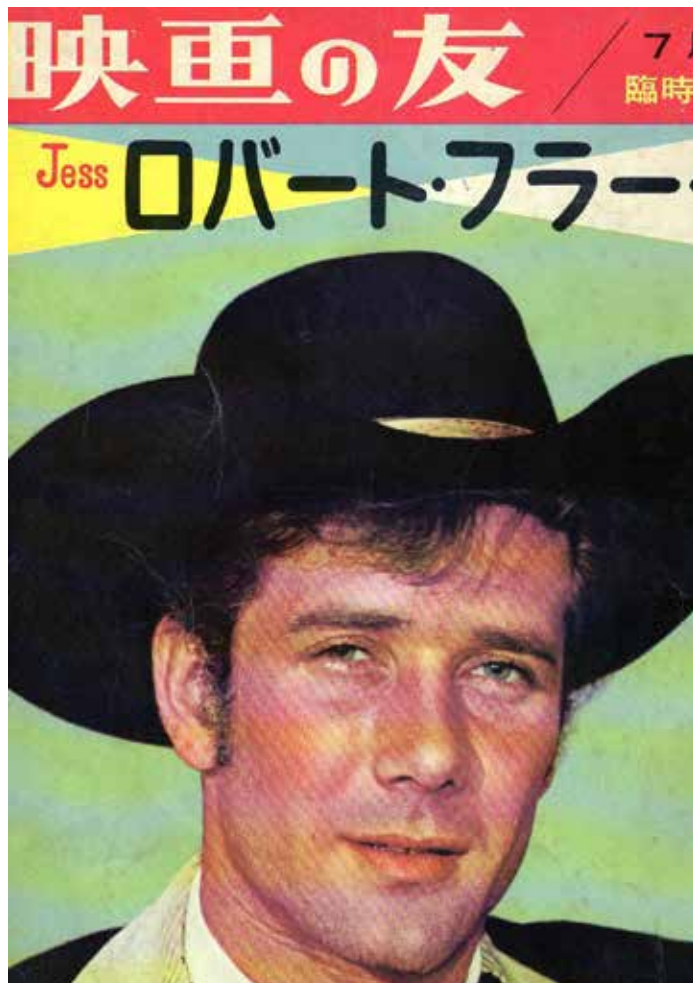
千葉豹一郎

「SHOGUN 将軍」のエミー賞18部門の大量受賞という快挙があったものの、昨今、日本では時代劇、アメリカでは西部劇の衰退が著しい。時代劇は縦社会、西部劇は横社会の世界であるから、両者を同一に並べて単純に比較するのは誤りである、という意見もあった。しかし、共に祖先たちに思いをはせ、自国の成り立ちを顧みる心のふるさとである点では変わりがなく、長年に渡ってよく対比されてきた。両者の盛衰も不思議なほど酷似していて、昭和30年代前半にピークを迎えた東映に代表される時代劇は、テレビの普及などで急速に勢いを失っていった。テレビではその後も一定の人気を得ていたが、現在では時代劇は

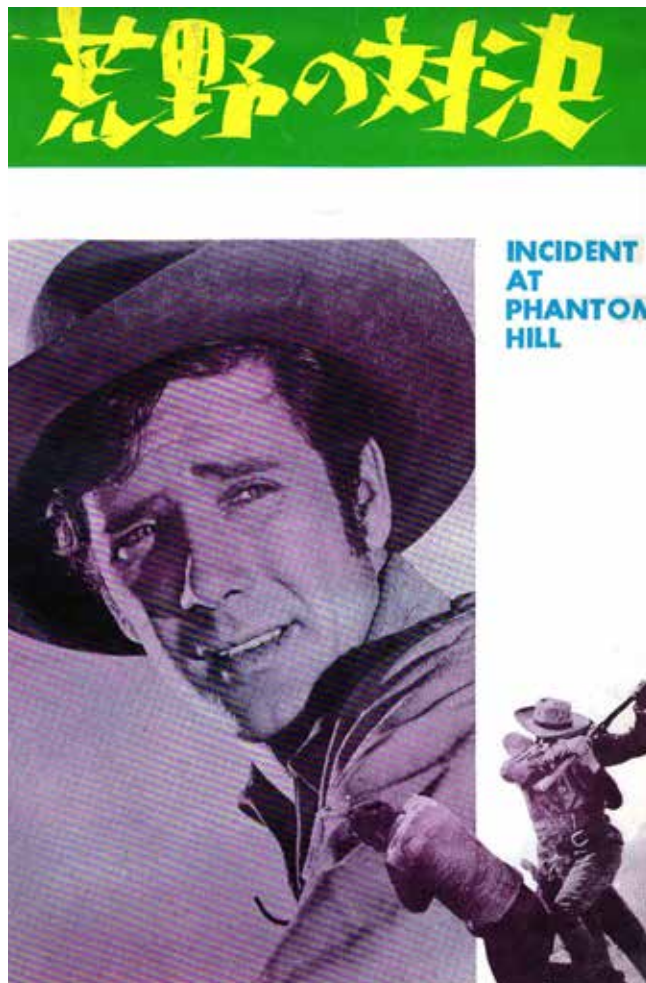
激減し、アメリカでも西部劇が衰退して久しい。レンタルビデオ店で、西部劇の棚を探していたら見当たらず、映画検定を受けているという中年の店員に「最近は人気なくてね。若い人は西部劇という言葉さえ知らない人も多いですよ」と言われ驚いたことがある。それも、もう20年近く前のことだ。時代劇と共に絶滅危惧種とまでいえる状況で、かつての人氣が信じられないほどだ。

アメリカで最初のストーリーを持つ映画とされる「大列車強盗」(1903)も西部劇で、1960年代初頭までは高い人氣を誇る不滅のジャンルだった。西部劇はスターの登竜門でもあり、ゲーリー・クーパーやジョン・ウェ

インらの大スターもそこから巣立っていった。古くはトム・ミックス、戦後は西部劇にしか出演しなかったランドルフ・スコット、ジョエル・マックリーのような西部劇専門の有名スターもいて、西部劇に出なかった著名なスターはイギリス人のケーリー・グラントとミュージカル系のスターくらいだった。テレビでも西部劇は草創期から人気で、「ローン・レンジャー」や実在の人物を題材にした「アニーよ銃を取れ」「カウボーイGメン」などが日本でも人氣を博した。これらは子供向けで30分枠だったが、アダルト・ウエスタンと呼ばれる「ガンズモーク」「シャ



「ララミー牧場」も、特集号が出るほどの人気ぶりだった。



唯一の主演映画「荒野の対決」(66)。

社会現象を巻き起こした「ララミー牧場」

イアン」「ローハイド」などが登場すると空前の西部劇ブームが巻き起こった。特に「シャイアン」は大手の映画会社（ワーナー・ブラザーズ）が制作した最初の番組で、ワイド版といわれた初の1時間番組でもあった。日本でも開局間もないNET（現 テレ朝）に登場したクリント・イーストウッドの「ローハイド」がじりじり人気を上げ、こちらも日本で放送された初の1時間番組。映画音楽の巨匠ディミトリ・ティオムキン作曲、カントリー歌手のフランキー・レインが朗々と唄う「ローレン、ローレン〜」で始まる勇壮なテーマ曲も大ヒットし、これに続く「キッペンロミー、ローレン・ローハイ〜」の正確な歌詞をみんな知りたがっていた。映画も含めた西部劇の熱狂的なブームが起き、ほぼ同時期のガンブームも重なって、西部劇や銃に特化した雑誌や単行本が多数出版された。その熱気たるや凄まじいものだった。風土や文化も異なる日本でなぜこれほど熱狂したのか

といえば、狭い日本とは対極の広大な西部への憧れもあったのだろうが、やはり外画ドラマの影響だろう。そうしたブームにさらに拍車をかけたのが、「ララミー牧場」だった。折しも、皇太子のご成婚パレードがテレビ受像機の普及に大きく貢献したが、外画ドラマをはじめとした人気番組もその一翼を担っていた。「荒野の決闘」(46)など多くの名作西部劇に出演した名優ヘンリー・フォンダのような大物も「胸に輝く銀の星」に主演し、この番組を観たいがために高価だったテレビを無理して月賦（ローン）で買った向きも多かった。ところがこの番組、フォンダの吹き替えがえらく不評なうえに、目玉のフォンダの出番も毎回少なく、詐欺だという声まで出て看板倒れに終わった・・・。

「ララミー牧場」の方は本国ではそれほど人気のある番組ではなく、主演のロバート・フラーもジョン・スミスもほぼ無名の俳優だった。出来という点でも、「ローハイド」

や「シャイアン」などの方が明らかに上だった。しかし、日本の関係者が内容も甘いマスクのフラーも絶対に日本で受けると確信し即座に買い付けた。読みは当たり、最高視聴率も先行した「ローハイド」を追い抜き、外画ドラマ史上最高の「ベン・ケーシー」には及ばなかったものの、人気とより大きな社会現象を巻き起こした点では「ベン・ケーシー」を凌いだ。

1961年のフラーの来日時には羽田空港に十万人！が押し寄せ、予想をはるかに上回る歓迎ぶりにフラーが思わず涙ぐんだという。後のアラン・ドロンなどの比でなく、娘がファンだという池田首相（当時）と面会までしているのだ。うちの近所にも羽田へ行ったお兄さんがいて、その様子を聞いている。フラーを乗せた飛行機が大幅に遅れて深夜になったが、諦めて帰る人はほとんどなく、フラーが姿を現すと異様な熱気に包まれたという。ほとんど徹夜で未明に徒歩で帰宅

外国テレビ映画の専門誌

テレビジョンエイジ

西部の男ベスト16(1)/グレッグ・ハリスン物語



●来シーズンも続く「白バイ野郎ジョン＆バンチ」
●3大ネットワークの80～81年度シーズン対策

後年まで忘れ去られることのなかったジェスとスリムのコンビ。

さくらがた



フラーが最初！
初心者でも……手軽にいっばしのカメラマンになれるインスタントの魅力が、すっかりフラーの気に入られました。ララミーへ送る一番のおみやげは、コニカで撮った帯白のアルバムです。
コニカはまったく新しい考え方で作られ、数字のことは忘れてファインダーの中の針を合わせるだけで露出が決まる新しいプログラム方式です。レンズもピントがよく、露・中・近のどれかに合わせればよい便利です。

¥11,800
キタローカメラ ¥1,800

さくらがたフィルム

コニカ

フラーは両親と一緒にカメラのCMにも出ている。

社会現象を巻き起こした「ララミー牧場」

したお兄さんは、疲れも見せずに興奮冷めやらない様子で、貴重な瞬間を伝えてくれた。3週間余りの滞在中は各地で大歓迎を受け、当時の写真を見るとまるで凱旋パレードさながらの混雑ぶりだった。同じ年の9月にも両親と共に来日して、再び大歓迎されている。これに気を良くしてか、帰国後に制作された新シーズン（この3シーズン目からカラー化）では、日本からの客が来るエピソードも制作された。

もっとも、こうした大成功の裏には、日本の関係者の涙ぐましい努力があった。

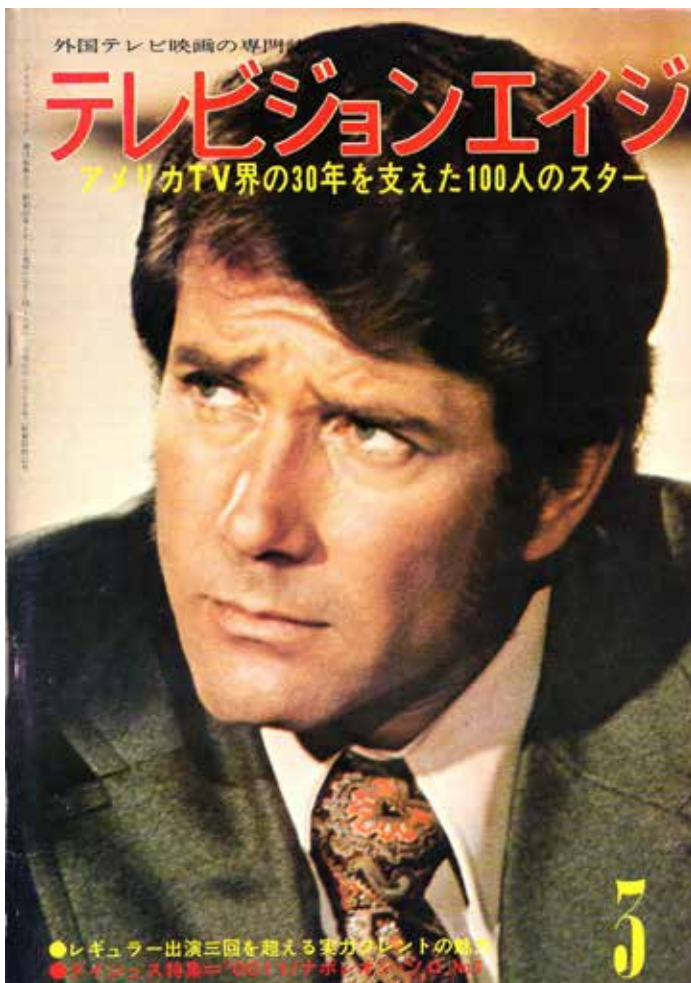
西部劇はどちらかといえば男の世界で、それまで女性には敬遠されていた。しかし、スポンサーのアサヒビールとバヤリースは、「ララミー牧場」は女性や子供も含めて家族で安心して楽しめるホームドラマの要素もあることを、ダイレクトメールなども使って懸命にアピール。CMを入れるタイミングにも細心の注意を払った。さらに、送られてきたファンレターには可能な限り返事を出

し、番組のグッズも気前よくプレゼントした。バヤリースのオレンジジュースは、まだソフトドリンクの種類が少なかった当時、宴会や結婚式などに必ずと言っていいほど供され子供には絶大な人気があった。クレイジー・キャッツの映画や番組にもよく出てきて、ジュースの代名詞でもあった。中でも最も人気を盛り上げたのは、日本で付けた主題歌と吹き替えだろう。「ララミー牧場」のテーマ曲に乗せた主題歌は、荒涼たる西部の風景が即座に浮かぶ「ローハイド」の主題歌とは対照的に、日本人の心の琴線に触れるウェットさがあった。草は青く、山遠く〜で始まるデューク・エイセスの唄う主題歌が流れると、何かうるっとしたものだった。内容も、ワイオミング州のララミーで駅馬車の中継所を営むシャーマン家に流れ着いたガンマンのジェス・ハーバー（フラワー 声 久松保夫）が、一家と協力して悪をくじくお話し。同じワイオミングを舞台にした名作「シェーン」(53)を想起さ

いなせなフラワーとピタリとマッチした。日本橋久松町生まれの生粋の江戸っ子で、芸名もそこから来ている（勝手に付けられたという）。江戸弁も氏のアイデアで、当初は苦情もあったが人気を押し上げて定着し、「そうじゃねいのか」というセリフはジェスの常套句となり氏の功績は計り知れない。なお、忘れてならないのは、番組の終わりに登場する「西部こぼれ話」というコーナーである。ここで紹介されるもろもろの話は、いっそう西部への興味をかき立てた。このコーナーの解説を担当したのが、当時「映画の友」の編集長だった淀川長治氏。当初は乗り気ではなかったが、「スターダスト」の作曲者で「我らの生涯の最良の年」(46)や「情熱の狂騒曲」(49)などにも出演した、鼻眞のホーギー・カーマイケルが出ているので引き受けたという。これで注目され、後に同局の「日曜洋画劇場」の解説を亡くなるまで続けたのはご存じの通りである。こうしたすべてが奏功して、放送直後から絶大な人気を博した。フラワーの来日時には、久松、淀川の両氏をはじめ日本語版の出演者らが羽田で出迎え、特別に組まれた番組にも共に出演した。久松氏はフラワーと連れ立って銀座で蕎麦を食したりしてより親交を深め、「日真名氏〜」の生CMにフラワーが出演するという幸運にも恵まれた。

他の出演者は、シャーマン家の長男で全然スリムではないスリム・シャーマン（ジョン・スミス 声 村瀬正彦）、スリムの弟アンディ（ロバート・クロフォード・ジュニア 声 渋沢詩子）、爺やと呼ばれるコックのジョージ（ホーギー・カーマイケル 声 八奈見乗児）ら。ピリング（序列）ではスミスの方がフラワーより先だったが、日本の人気は遠く及ばなかった。フラワーと一緒に来日するはずだったスミスが、母親の病気で同行しなかったのは幸いと言わなければならない。その後、単独で来日したが、フラワーのような熱狂はもろくなかった。カーマイケルやクロフォードが途中から姿を消

「エマーゼンシー！」のフラワー。スーツも良く似合う。



社会現象を巻き起こした「ララミー牧場」

すなどレギュラーの入れ替えもあったが、人気に響くことはなかった。駅馬車の中継所だけに善悪さまざまな人間が出入りして、友情や家族愛も描かれ、定番の悪い奴らとの対決で見るジェスの早撃ちは注目の的だった。フラーはニューヨーク生まれだったが、早撃ち、乗馬、投げ縄の名手で、劇中では特技を十分に披露した。

ジェスの下敷きなどのキャラクター商品は子供たちに大人気で、「ララミー友の会」や「ララミー牧場」と冠した牧場も生まれ、アメリカに渡ってララミーでカウボーイになりたいと本気で考える人も少なくなかった。西部は昼夜の寒暖差が激しく、ララミーが昼間でも氷点下のままの日もあることなど知らない人がほとんどで、情報の少なかった時代ならではだ。

しかし、翌年の1962年あたりから、あれほどの隆盛を誇った西部劇ブームも急速にしばんでいった。皮肉にも、オールスターのシネラマ超大作「西部開拓史」(62)は去り行く西部劇ブームへの挽歌のようになってしまった。この前年には出演予定だったゲーリー・クーパーが死去し、テレビ西部劇の台頭で多作されていたB級西部劇が激減し、「もはや、私の活躍する場所はなくなった」の名言を残してランドルフ・スコットが引退宣言。盟友のジョエル・マックリーも後に続いた。「西部開拓史」への出演オファーがなかったことも一因といわれ、サム・ペキンパーが二人のために撮った「屋下がり決闘」(62)も時代に乗り遅れた老ガンマンの末路を描いたものだった……。こうした世代交代や時代の変化に加え、「西部開拓史」の原題(How the West Was Won)が象徴するように、白人の視点に立った従前の先住民(いわゆるインディアン)に対する描写が問題視されるようになり、公民権運動の激化などもあって西部劇が作りにくくなったことも大きかった。日本でも熱くなった分、冷めるのも早かった。「ララミー牧場」は63年まで放送されたが、かつてのような熱狂ぶりは影を潜め、熱しやすく冷めやすい日本人の国民性を実感させた。

その後のフラーは、「荒野の七人」(60)の続編「続・荒野の七人」(66)や人気番組の「幌馬車隊」のレギュラーにもキャストイン。来日時に偶然羽田に居合わせたユニヴァーサル映画の幹部が、日本での人気を当て込んだ唯一の主演映画「荒野の対決」(66)も制作された。しかし、戦争物のオファーを「ドイツにもぼくのファンがいるから」といって断ったり、持ち込まれる企画の数々に難色を示したといわれ好機を逃してしまった。前回の「ベン・ケーシー」のヴィンセント・エドワーズ以上に実績がなく、「ララミー牧場」以前に出演した映画は「友情ある説得」(56)など有名作が多いながらほとんどノンクレジットの端役で、他は人気シリーズのゲストばかり。ただ、70年代に6年間に渡って放送された「ER」の前身のような「エマーゼンシー！」に医師役で主演し、本国ではむしろこちらの方で知られている。日本でも放映が待たれたが、外画ドラマ自体が低迷していたうえ、折からの石油ショックで放映枠が激減したこともあり数本が不定期で放送されるに止まった。以後は「暴走パニック超特急」などのテレビ・ムービーや人気シリーズにゲスト出演し、80年代に「サーフサイド6」のトロイ・ドナヒュー、「サンセット77」のエドワード(エド)・バーンズらと、スーパーニッカのCM「懐かしのアメリカン・テレビシリーズ」の一篇に出演し、94年には「マーヴェリック」に顔を出して往年のファンを喜ばせた。ロバート・

フラー。ある年齢以上の日本人には、けっして忘れられない名である。現在は俳優を引退し、テキサスで家族と牧場を経営し91歳で健在である。

「ララミー牧場」1959～1963

モノクロ→カラー 60

Laramie レビュー・プロダクション

出演 ロバート・フラー

ジョン・スミス

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

© Miriamword Co., Ltd.



あの日、未来は明るかった――。
慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う
“昭和30年代のマスカルチャー”

ケーシー先生やカッパに憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぴいの少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の船橋の馬肉100%コンビーフや怪しい怪しいアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。“古き良き昭和”ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。

大田区大森を中心に、高度成長期の東京がいまきと替ります。

<p>付録ムービー テレビ・芸能</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. テレビの青春時代 2. 新編第2次アメリカのドラマ 3. アレシオカッパ 4. 東宝版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」 5. コマソンの女王 橋トシエ <p>家電</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 電気釜の裏づけ 7. カラーテレビ狂想曲 8. リモコンテレビが欲しい! 9. クーラーをひたすまま寝ると死ぬ!! 10. ボロロイドカメラ 11. 可愛いワジベットカメラ 12. 8ミリフィルム 	<p>食</p> <ol style="list-style-type: none"> 13. モナカカレーと「少年ジェット」 14. アメリカンフードの始めの十レネード 15. ハンバーガーの歴史 16. スイッチは始まる? 17. 味のフロンミン 18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ 19. 粉未ジュース感懐記 20. 傑作! 噴水型ジュース自販機 21. 10円アイスクリュームが花盛り 22. 消えたガムつけづけ <p>ホビー</p> <ol style="list-style-type: none"> 23. 鉄の手裏剣 24. 2B弾とラッカー 25. 観玉鉄砲の王道 	<ol style="list-style-type: none"> 26. 輝くマテル 27. 集まった金属製のモデルガン 28. プラモデル熱中時代 <p>社会・文化</p> <ol style="list-style-type: none"> 29. ケネディの時代 30. 外車愛蔵記 31. 国産車は悪魔車? 32. サンディッチのような車の三角窓 33. デパートはワンダーランド! 34. 町の映画館 35. 折りたたみ式コップ 36. 月宵マンガ隊と特撮 37. ベアベアのソフシート
--	--	--

当書DVD版は、月刊FDI編集部にて
本文：108ページ / 映像：2分23秒 2012年9月ミリアムワード(株)発行
価格：1,980円(税込)
株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F
TEL.03-6379-8890 FAX.03-6379-6190 info@uni-w.com